

## 園内環境を活用した幼児の美術・造形表現に関する研究 ～土を使った表現教材の開発～

A study of children's artistic expression using the kindergarten resources  
～ Development of expression materials using soil ～

石 上 洋 明

Yomei ISHIGAMI

学校教育ユニット

(令和2年9月30日受付, 令和2年12月10日受理)

子どもたちにとって身近な素材である「土」を使った造形教材の開発を行う。幼児が身近な環境と主体的に関わりながら、試行錯誤したり、考えたりすることができる素材として、ありふれた、園庭の土に着目した。土は、地域や場所によって色や特性が異なり、ふるい分ける、水を加えるなど、取り扱い方によって、様々な質感に姿を変える。

本稿では、土を素材とし、五感を通して色や質感の違いを楽しみ、素材の特性を活かした造形活動を楽しむことのできる教材として、土のクレヨンの製作を行った。

### 1. はじめに

幼稚園や保育所、認定こども園等で、幼児が土を使って遊んでいる様子を見ることができる。土は突きかためて山やトンネルを作ったり、水を加えて練って感触を楽しんだり、泥団子やごっこ遊びの材料にしたりと、さまざまな遊びを展開することができる。

筆者が4歳～5歳頃、通っていた保育園で泥団子づくりが子どもたちの中で流行し夢中で作っていた。当時作っていた泥団子は、光る泥団子ではなく、出来るだけ丸く作り、ひたすら丈夫さを求めて作ろうと試みていた。

誰が始めたのかは定かではないが、園庭の表面の砂を払って出てきた、硬く踏みしめられた土を削って団子をつくり、砂を振りかけて丸一日建物の陰になる部分に保管しておく。そうすることで、乾燥してもひび割れず、丈夫な泥団子ができると伝わっていた。当時の子どもたちは、口伝で製法や、保管するのに適した場所を伝え合っていた。

土は子どもにとって身近な環境からの入手が容易な素材である。そして、環境との対話、他者と

の対話、それぞれの始まりの時期に寄り添うことのできる、優れた素材である。

土の色や質感は多様であり、その土地の太古からの記憶を保存している。土の色や質感をもとに、その場所がどのような場所であったのかをうかがい知ることができる。土はその地域の環境と密接な関わりを持っている。

土の色は、ほとんどが「茶色」とイメージするだろう、しかし、土色と言っても、色彩は多様であり、個性豊かである。アーティスト、栗田宏一は保有している10,000種類以上の土のコレクションを紹介している。(栗田, 2004) 本書では、その一部を取り上げているが、紹介されている一部のコレクションだけでも、市販の絵の具以上に色彩豊かである。

土は我々の身近に存在し、衣食住の全てに関わっている。現代においても、伝統工芸として姿を残すものもある。

本稿では、身近な素材である土に着目し、「環境」と「表現」との結びつきを意識した教材について探る。

研究にあたって、福岡教育大学附属幼稚園で平

成 30 年度から実施している「土プロジェクト」に関わる機会をいただいた。

土プロジェクトでは、五感を通して色や質感の違いを楽しみ、素材の特性を活かした表現活動を楽しむことのできる教材として、土のクレヨンを製作した。

クレヨンは幼児にとっても身近な画材であり、土のクレヨンを作る過程では、土の色彩の多様性や、道具や他の素材との組み合わせによる質感の変化なども、同時に楽しむことができる。

クレヨン作りや、プロジェクトを通し、幼児たちは採取した場所による土の色や質感の違い、様々な道具や素材との組み合わせによる、土の感触の変化に気付き、積極的に園内の環境に関わりを持って遊ぼうとする様子が見られた。

## 2. 環境と土

土は非常に身近に存在する素材である。どこにでもある、ありふれた存在ではあるが、その土地の土を見ることで、地域の特性や成り立ち、環境を知るきっかけともなる。

土は古来より衣・食・住それぞれに関わる素材として、我々の生活を支えるものでもあった。素材として身近にあり、入手しやすい土は、継続的な生産にも寄与することとなり、現代において、伝統工芸としてのアイデンティティを獲得しているものも多い。

陶芸、人形、染物、岩絵具、土壁、畳、直接的な素材では無いが、鋳物も伝統的な鋳造技法では、土を鋳型の材料として用いる。

伝統工芸品は、プラスチック製品などが生産される遙か以前より、その製法が確立しているものであり、伝統に則って製作した場合は材料だけではなく、製作に関わる道具についても、環境負荷の小さい天然由来のものであることが多い。さらに、製品の修復方法や、修復不能であった場合のリサイクル方法も用意されており、無駄がない。

地域によっては、博多塀、トンバイ塀など、割れた瓦や陶器、使い古した耐火煉瓦などの廃材をリサイクルして作った塀などを見ることができる。

伝統工芸等で土を素材として使用する場合は、用途に応じて調整する必要がある。土の質感を整える際には、篩にかける方法が一般的だが、より肌理の細かい土を得ようとする場合は、「水簸(すいひー水干、水飛、水漉と表記する場合もある)」という方法をとる。

水簸は、粒子の大きさの違いによる、水中での沈殿速度の差を利用した分別方法である。土を水

に入れてよく攪拌し、しばらく時間を置くと、粒の大きな砂などは下に沈み、細かな粒子の土や粘土分は泥水となって水中に漂う状態となる。

容器の底に沈殿した土や砂が混ざらないよう、静かに上澄みを別の容器に移し、乾燥させて水分を抜くと、非常に細かな粒子の土を得ることができる。沈殿を待つ時間を調整することによって、さらに細かな粒子の土に分別することも可能である。

掘り出したばかりの土は、土以外の不純物が混じる場合もある。植物片など、軽い不純物は水面に浮かんだ状態となるため、細かな篩を通すことによって除去することができる。篩だけでは除去することはできない不純物も、水簸によって取り去ることができるため、陶芸などで使用する陶土の調整にも、水簸を用いる場合がある。(関根, 2017)

## 3. 子どもの造形活動への応用

土を用いた保育は、多くの幼稚園、保育所、認定こども園等でも取り入れられている。土の魅力は入手の容易さ、色彩の多様さ、感触の面白さ、可塑性など、多岐にわたる。

土を採取する活動からも、多くの経験を得ることができる。いい土を探すために、子どもたちが協力しあって探索することもあるだろう。素材を採取するために土を掘り起こす過程で、様々な生き物との出会いも経験することができる。

造形の素材としてだけではなく、土を起点として、周囲の環境に対して興味を持つきっかけともなる。

幼児の遊びの中で水簸を行う機会はあまりないだろうが、使う道具は一般的なもののばかりであり、新たに道具を購入しなくとも、すぐに保育に取り入れることができる。

ペットボトルなどの、透明な空き容器を使うと、土の攪拌も容易であり、土が沈殿して層に分かれる様子を観察することができる。水簸で取り出すことができる、粘土分を多く含んだとろとろの土の感触も楽しむことができるが、時間経過によって変化する土の様子を観察することも、十分に楽しむことができる要素の一つではないだろうか。

幼児は何気ない遊びや活動を通して、様々な経験をしている。「土」というプリミティブな素材は、取り扱いによって、様々な姿に形を変える。幼児は五感を使って素材の様子や変化を楽しむ。そこで得た経験を、これまでに得た経験と関連付けながらさらに遊びを発展させていく。

土の扱いには時間がかかることもある。季節によっては、水を足して練り合わせ、形を整えて固まるまでに一晚程度の時間を要するだろう。幼児はいろいろな工夫をしながら、翌日の結果を楽しむに過ごすことが出来る。これらの活動から、継続的に物事を観察する力と想像力が育まれるのではないだろうか。

#### 4. 土を使った表現教材「土のクレヨン」

子ども同士での伝え合いで、遊びが発展していく様子は理想の保育の一つと言える。子どもだけで遊びを深め、発展させてゆくためには、煩雑な工程や、大人の手を必要とする技術を減らし、できるだけシンプルで、新しい遊びを見つけることのできる余地を残した教材であることが望ましい。

本稿では、土を用いた造形表現の教材として「土の画材」を提案したい。子どもにとって身近な土を用い、身近な道具であるクレヨンや、パステルなどの画材を作り、保育の中に取り入れる。作ることの楽しさと、使うことの楽しさ、双方を味わうことができる。

自分で色々な土を集め、時間をかけて土を調整して画材を作る。土を集める場面では、土の色や質感の多様性に気づき、土を調整する際には、篩や水を使うことによって変容する、土の様子を見て楽しむことだろう。日常の中で気づいたことと関連づけて、土を起点にさらに多くのことを発展させていくことが期待できる。

土の画材は、周囲の環境から入手した素材を使うことによって、再度元の場所に戻しても環境に負荷を与えにくいという利点がある。

本教材は、「周囲の自然から得て、遊びを通して自然に還す」をコンセプトとして据えて展開する。

土のパステルは、土に含まれた粘土分が結合材として働くため、水簸した土だけで作ることができる。(栗田, 2004) 水簸して、水分をある程度飛ばした泥状の土を型に流し込み、日陰で乾燥させるだけでパステルが出来上がる。

パステルは土そのものの色味のため、土本来の色を楽しむことができる。紙などに描いた感触もサラサラとしており、非常に心地よい。コンクリートの地面などにも描くことができ、水で洗い流すことができるため、様々な遊びに応用することができる。しかし、紙に描いた場合は剥がれやすく、少し手で擦るだけで消えてしまう。また、つるつるとした質感の素材には描くことが困難である。

パステルをより扱いやすくするために、ワックス分を添加したものがクレヨンである。紙などへ

の食いつきがよく、多少手で擦っただけでは落ちることはない。

インターネットの検索サイトで、「クレヨンづくり」と検索すると、いくつかの実践例を確認することができる。また、「図画工作・造形教育教材集<改訂版>子どものための美術 Art for Children 2020」, 「土のコレクション」でも、クレヨンの作り方について確認することができた。

クレヨンの材料や、素材の用途に関しては、各資料に加え、画材メーカー大手の「サクラクレパス」のホームページのコラムでも紹介されている。

クレヨンは、顔料とワックスから作られる。ワックスの素材に応じて、使い勝手を良くするために、オイル状の素材を添加する場合もあり、そのレシピは用途や、製作する状況に応じて工夫されている。

現在の日本製のクレヨンには顔料と固形ワックスに加え、体質顔料と液体油を混ぜ、よりなめらかに描きやすいよう、軟らかめに調整されている。

素材を混合した後に、使いやすい形に成形する方法は、練り合わせて成形する方法と、型に流し込む方法の2点に絞られた。

教材の製作にあたって、土のクレヨンの試作を行った。素材として使用した土は、大学内で採取したものである。

土の粒度の調整には、水簸と、篩にかける方法の2パターンを試した。水簸した土は滑らかな感触だが、篩にかけた土は、少し砂っぽい、ザラザラとした感触が残る。特に水を混ぜて指先で練ると、より顕著に違いがわかる。

使用するワックスは、自然環境に影響の小さな素材として、蜜蝋を使用した。蜜蝋のみを使用したクレヨンは硬く粘り気があり、伸びが悪い。描き味も悪く、市販のクレヨンのようにスラスラとは描けない。蜜蝋の粘り気を減らし、描き味を高めるため、サラダ油を添加することとした。

しかし、サラダ油を添加しすぎると、クレヨンとしての形状を保ちにくくなり、紙などに描こうとするとすぐに折れてしまう。また、時間が経過すると、クレヨンの表面に油分が滲み出し、ベタつきが生じる。同時に油が酸化した、どことなく嫌なニオイも発生させてしまうこともある。

顔料、ワックス、添加するオイルの分量の比率は非常にシビアであり、特に天然の素材を使用する場合は、その素材の特性を理解して、分量を調整する必要がある。

滑らかな書き心地を追求すると、石油由来のパラフィン、固形ワックス分として使用すると良



写真1 クレヨン作りのための溶解用ツール

いが、外遊びなどで使うことも想定すると、パラフィンの使用は少なからず環境に負荷をかけてしまう懸念があるため、教材のコンセプトからは外れてしまう。

後述する附属幼稚園でのクレヨン作りの実践では、顔料、固形ワックス、液体油の3種類の材料で構成する、シンプルな製作方法を採用した。また、クレヨンの整形方法については、幼児が出来立ての熱いクレヨンに触れなくてもよい、型への流し込みを採用した。

顔料は水簸した土、固形ワックスは蜜蝋、液体油はサラダ油をそれぞれ使用した。分量は、出来上がったクレヨンの様子を見ながら微調整を行ったが、概ね体積比で蜜蝋9：土5：サラダ油1程度であった。

実践に向けて準備した蜜蝋を溶かすためには、65℃程度の温度が必要であった。溶かした蜜蝋に材料を加え、攪拌する工程も園児に体験してもらうため、安全面に配慮した溶解用のツールを製作した。(写真1)

蜜蝋は湯煎で溶かすことができるため、沸騰しない程度のお湯を張った鍋を使用する。湯煎用の容器は使い捨てのプラスチックカップ(インサートカップ)を使用した。プラスチック製のカップを使用する際には、耐熱温度を確認する必要がある。多く流通しているプラスチックカップは、通常冷たい飲み物を飲む際に使用するものであり、温かい飲み物を入れることを想定していない。耐熱温度は60℃程度のものが多く、蜜蝋の湯煎には不向きである。本実践で使用したインサートカップは、ホットコーヒーなどでの使用を想定した商品である。耐熱温度は80℃であり、蜜蝋の湯煎の温度にも耐えることができる。

熱源は安全性の高いIHクッキングヒーターを使用した。ヒーターと鍋を取り囲むように木枠を

作り、子どもが直接熱源やお湯に触れることが無いよう安全面に配慮した。囲いの天板には、湯煎用のカップを入れるために5つの穴を開け、中央にデジタル温度計を設置できるように小さな穴を開けている。

## 5. 福岡教育大学附属幼稚園の実践

福岡教育大学附属幼稚園の中村春美教諭が担任をされたクラスでは、平成30年度から、土をテーマとした「土プロジェクト」に取り組んでいる。

「土プロジェクト」での取り組みについて、中村教諭へのインタビューを行い、土プロジェクトの始まりから、その後の展開までをまとめた。

平成30年度からの土プロジェクトの流れは以下の通りであった。

- ① 平成30年5月頃～「土プロジェクトの始まり」
- ② 平成30年7月頃～「サラサラ土遊び」
- ③ 平成30年10月頃～「サラサラ土でのお菓子作り」
- ④ 平成31年1月頃～「光る泥団子作り」
- ⑤ 令和元年5月頃～「土でのお絵かき」
- ⑥ 令和元年5月頃～「土のクレヨン作り」

### ①土プロジェクトの始まり

4歳児クラスの幼児たちは、5歳児クラスの幼児たちが土を型に入れて固めて遊んでいる姿を真似して遊び始めたことから、土を使った遊びが自然発生的に始まった。土を食べ物に見立て、土のチョコレート作りとして遊びを楽しんでいた。

4歳児クラスの担任である中村教諭が「土の色って、どんな色？」(栗田, 2006)と出会い、プロジェクトとして発展した。

### ②サラサラ土遊び

土のチョコレート作りは継続しており、遊んだあとの、ボウルに残った乾いた土から、サラサラとした土の状態に気づいて遊び始めた。

遊びの中では、ボウルにくっついた土を潰し、細かな粉末にして集めたり、感触を楽しんだりする様子が見られた。

それまでも、砂場にある網目の粗いプラスチックの篩を使って、サラサラの砂を作って遊ぶ姿も見られていたため、次の展開として新たに茶漉しや、篩った土を入れる透明な容器を準備しておい

た。

そこから次の遊び、サラサラ土作りが始まった。サラサラ土作りでは、透明な瓶に入れた土に、色の違う層が出来ていることに気づき、土によって色が違うことに気づき始める様子が見られた。

土を採取した築山の上と下、近い場所でも採取した場所による色の違いが出ることに気づいていた。

### ③サラサラ土でのお菓子作り

サラサラ土を使い、これまでに遊んでいた型に土を入れて固める遊びを発展させ始めた。掘り出したままの土ではなく、サラサラの土を使うことで、もっと綺麗な土のチョコレートができるのではないかという期待を持って始めた。

しかし、乾燥時に割れてしまうなど、うまく固まらない失敗が続いた。幼児たちは、型の大きさを変えるなど、それぞれが工夫しながら、新しい遊びに挑戦し始めていた。

幼児たちは、遊びの中からサラサラ土に水をたくさん加えることによって、クリーム状の土ができることに気づいた。ここから、クリーム状の土を、これまで作っていた粒の大きな土を固めた土台にかけるケーキ作りの遊びが始まった。

土のお菓子作りが広がる中で、幼児のひとりが水の量を少なくして練ることで、モチモチのお餅のような感触になることに気づいた。土と水の量の加減で、いろいろなものが作れることに気づき、土のお菓子作りがさらに発展した。

### ④光る泥団子作り

土のお菓子作りから発展し、泥団子作りが始まった。筆者が本プロジェクトに関わる中で、光る泥団子を作り、幼児が気づきやすい場所にそっと置いておいた。幼児は早速光る泥団子に気づき、同じように泥団子を光らせようと試行錯誤し始めていた。

進級後も、継続的に泥団子作りを行っていた。遊びの中から、偶然幼児が築山の特定の場所で取れるフワフワの土をかけることで、自らピカピカの泥団子の作り方に気づいた。小石が混ざった土だが、泥団子に振りかけることによって、小石は下に落ち、フワフワした土だけが団子の上に残る状況に気づき、幼児同士で教え合うことで光る泥団子作りをさらに発展させた。

### ⑤土でのお絵かき

泥団子や土のお菓子作りなど、土を使った遊び

を楽しむ中で、幼児は土の状態に敏感に気づくようになった。遊びに使う土を採取する最中に、石とは異なる、硬い土の塊の存在に気づいた。

土の塊を見つけた幼児は、砂場を囲うコンクリートのところに持って行き、絵を描き始める様子が見られた。

### ⑥土のクレヨン作り

これまでの遊びが関連し合う、新しい遊びとして「土のクレヨン作り」を中村教諭から幼児たちに対して提案した。筆者がゲストティーチャーとして関わり、水簸での素材作りと、土のクレヨン作りを行った。

素材作りでは、幼児にとって新しい試みである、水簸を行った。水と土を混ぜて泥水を作り、しばらく待つと層に別れる。幼児たちは、その状態を太陽に透かしながら観察して楽しんでた。

集めた上澄み液を乾燥させ、細かい粒子の土を集める工程では、板状に固まった土を砕く際に出る土煙を見て、これまでに作っていたサラサラ土とは違う質感に気づく様子も見られた。

また、水たまりが干上がった後、表面に残るべたついた土と、水簸した際に出来た土の状態との間に共通性を見つける様子も見られた。

土のクレヨン作りでは、幼児たちが集めて作った赤土と築山の黄土色のサラサラ土を使った。幼児たちはそれぞれの土を単独で使ったり、混ぜ合わせたりしながらクレヨン作りを楽しんだ。

幼児たちからは、乾燥した状態の土と、クレヨンに混ぜた時の土の色の違いに気づく様子がうかがえた。完成した土のクレヨンを見て、「チョコレートみたい」、「使うのがもったいない」など、自ら作ったクレヨンに愛着を持つ様子も見られた。

### その後

土遊びが附属幼稚園全体の伝統になり、幼児たちの遊びの中で継続している。土で遊ぶ年長児の様子を見た年小・年中児が真似をして遊ぶ姿や、子ども同士の伝え合いなどから、持続的に遊び続ける姿が見られる。

保育者からのアプローチとして、保育環境の中に、茶こしや細かな網目の篩が砂場のおもちゃとして配置されるようになった。

幼児たちは土や土の中の世界への興味が増し、土を掘って様々なものを見つける機会が増えた。築山を掘って大きな穴を作り、水を貯めて温泉ごっこを楽しむ姿や、その近くでは練った土をコ

テでならし、工事ごっこを楽しむ様子も見られた。また、腐葉土作りや、土を掘って遊ぶ中で、土中の生き物にも興味を持ち、季節による土の中の生き物の変化などについても知るきっかけともなった。

## 6. 考察

「土を使った表現教材」と、身近な環境との関わりに関する領域「環境」、感性と表現に関する領域「表現」との関連性について表に示し、整理した。(表1)

土のクレヨン作りでは幼稚園の園内環境や、隣

表1 領域「環境」、「表現」と「土を使った表現教材」との関わり(筆者作成)

	内容(幼稚園教育要領より)	土のクレヨン作りでの幼児の姿
身近な環境との関わりに関する領域「環境」	(1) 自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。	○土に直接触れることによって、土の感触、素材の変化を楽しむ。 ○土を採取する場所によって、色や質感が違うことに気づく。
	(2) 生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ。	○水を使った土の選別方法を通し、土の性質の不思議さを楽しむ。
	(3) 季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。	-
	(4) 自然などの身近な事象に関心を持ち、取り入れて遊ぶ。	○掘り出したばかりの土と、乾燥させた土の色の違いに気づき、遊びに取り入れる。
	(5) 身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。	-
	(6) 日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ。	○伝統的な土の取り扱い方に触れ、遊びを通して日本の伝統文化に親しむ。
	(7) 身近な物を大切にする。	○自分で作った色々な質感の土や、パステル、クレヨンに愛着を持つ。
	(8) 身近な物や遊具に興味をもって関わり、自分なりに比べたり、関連付けたりしながら考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。	○雨上がりの水たまりのあとにできる、細かい粒子の泥との関連性に気づく。
	(9) 日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ。	○土の採取や土作りを工夫する中で、分量の概念などに関心を持つ。
	(10) 日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ。	-
	(11) 生活に関係の深い情報や施設などに関心をもつ。	○新しい作り方、遊び方などについて、自分で見つけた情報を周囲の友達と伝え合う。
	(12) 幼稚園内外の行事において国旗に親しむ。	-
感性と表現に関する領域「表現」	(1) 生活の中で様々な音、形、色、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。	○土に直接触れることによって、土の感触、素材の変化を楽しむ。 ○土を採取する場所によって、色や質感が違うことに気づく。
	(2) 生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。	○土の色や質感を活用し、想像を巡らせて遊びを展開する。
	(3) 様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。	○様々な土の色彩、質感、感触などを、言葉で伝え合う。
	(4) 感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。	○採取した土を使い、素材の面白さを感じながら、自由に表現を楽しむ。
	(5) いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。	○土や水の素材、道具、自然現象など、それぞれを組み合わせながら楽しむ。
	(6) 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。	-
	(7) かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりなどする。	○作ったクレヨンを使い、描いて遊ぶ。 ○素材の土の違いによる色の差を楽しみ、集めて楽しむ。
	(8) 自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。	○土を食べ物などに見立てて、遊びを楽しむ。

接する大学の環境から得た土を素材として使用している。土を使用した幼児の活動から、「環境」領域の内容との関わりが深いことが示された。

一方、「表現」領域についても、クレヨンを作る過程、作ったクレヨンで描く、土のクレヨンをチョコレートに見立てる様子など、領域との関わりが大きいことが明らかになった。

本実践での土のチョコレート作りは一度のみであったが、これからも継続して取り組むことによって、今回の実践では見られなかった他の姿も見取ることが出来るのではないだろうか。

土のクレヨン作り以外の土プロジェクトでの取り組み全体に目を向けると、土を起点として環境領域の内容を網羅するような幼児の姿が見られる。

さらに注目したいポイントは、土プロジェクト開始から1年以上経過し、現在では異年齢の幼児の関わりによって、土での遊びが継承されている点である。教師や、ゲスト講師として関わった筆者の提案を取り入れながら、幼児だけで遊びを伝え合い、発展させるサイクルができつつあり、土から派生する様々な環境にも興味を広げる様子もうかがえた。

今後の展開として、幼児同士の伝え合いによる、自発的な遊びの継続や発展を目指し、そこから派生する新しい遊びのヒントを、いかに普段の遊びの中に散りばめていくかが重要になるだろう。

## 7. おわりに

本研究では、土を起点とした子どもの活動の広がりについて、環境教育と芸術表現、2つの観点から考察した。

土は日常に溢れる、特に何の変哲もないありふれた素材ではあるが、改めてじっくりと目を向けてみると、非常に表情豊かな存在であることを認識することができた。

子どもたちは、造形活動など、遊びを通して素材の色や感触、匂いなど、様々な感覚器を活用して接することによって、素材の多様性に気づき、人と物との対話を知る。そして、同時に他の友達の見方への多様性にも気づき、子ども同士の伝え合いの中から遊びを発展させ、人と人の対話について意識を広げる。

人と自然がバランスのとれた、いい距離感で関わり合うことで、文化の多様性、生物の多様性など、それぞれを同時に実現できる。

調和のとれた環境は、持続可能な社会、そして環境を作り上げるために、必要不可欠なことだろ

う。これからの時代を担う子ども自身が、様々なことに興味を広げながら、心地よい場を見つけ、創り出すことができるよう、我々大人はどのようなきっかけを提供することができるか、「環境と芸術表現」をテーマとし、これからも研究を進めたい。

## 謝辞

研究にあたって、福岡教育大学附属幼稚園 教諭 中村春美氏には、教材を活用した実践の場として、貴重な保育の時間をご提供いただきました。また、実践時や、実践後の幼児の様子についてのインタビュー調査にも、快くご協力いただき、心より感謝申し上げます。福岡教育大学附属幼稚園 園長 井手正弘氏、教頭 福井寿子氏、福岡教育大学教育学部 教授 見上昌陸氏には、研究、実践に際し、多大なるご支援とご協力をいただきました。ここに謝意を表します。

## 引用・参考文献

- 荒井経 (2015) 「日本画と材料－近代に創られた伝統」、武蔵野美術大学出版局
- 朝廣和夫 (2018) 「農山村の自然と人の営みをつなぐアートの可能性」、九州大学ソーシャルアートラボ編『ソーシャルアートラボ 地域と社会をひらく』, pp.64-73, 水曜社
- 福岡教育大学附属幼稚園 (2020) 「プロジェクトの充実に向けた環境構成の工夫 4歳児から5歳児にかけての土プロジェクトの取り組みから～」, 『令和元年度 第65回幼稚園教育研究集会報告書』, pp.66-67, 全国国立大学附属学校連盟幼稚園部会・国立大学法人神戸大学附属幼稚園
- 挾土修平 (2012) 「挾土修平の生きる力」(ソリストの思考術 第5巻) 六耀社
- 北海道立教育研究所附属理科教育センター (発行年不明) 「土色のクレヨンをつくろう」, <[http://www.ricen.hokkaido-c.ed.jp/ht/240chigaku\\_jikken/24007km\\_monkey2/242monkey2.html](http://www.ricen.hokkaido-c.ed.jp/ht/240chigaku_jikken/24007km_monkey2/242monkey2.html)> (参照 2020年9月24日)
- 加藤隆之 (2020) 「クレヨンをつくろう」, 福岡教育大学美術教育ユニット編『図画工作・造形教育教材集<改訂版>子どものための美術 Art for Children 2020』, pp.64-65, 日本文教出版
- 鹿取一男 (1983) 「美術鑄物の手法」, アグネ
- 栗田宏一 (2004) 「土のコレクション」(ふしぎコレクション 3) フレーベル館
- 栗田宏一 (2006) 「土の色って、どんな色?」(た

- くさんのふしぎ傑作集) 福音館書店  
京都造形大学 (2015) 「5月18日・25日 創作の時間『土のクレヨン』 こども芸術学科教授 森本玄」 <<https://www.kyoto-art.ac.jp/production/?p=42575>> (参照 2020年9月24日)  
松原雅裕・金田裕子 (2019) 「大地の色の蜜蝋クレヨンをつくろう」, <<https://gogo.wildmind.jp/feed/howto/200>> (参照 2020年9月24日)  
文部科学省 (2018) 「幼稚園教育要領解説」, フレーベル館  
森本玄 (2014) 「土からクレヨンをつくる 2014 2年次造形表現 IV」, <<https://www.kyoto-art.ac.jp/production/?p=35034>> (参照 2020年9月24日)  
萩田雅弘・田中博子・岡崎聡郎・西義信・松原陽子・石田まゆみ (2008) 「泥のクレヨン作り」, 『人と自然からのメッセージ』 (共生のひろば3号) pp.10-12, 兵庫県立人と自然の博物館  
大澤寅雄 (2018) 「持続可能な社会のための文化の多様性」, 九州大学ソーシャルアートラボ編『ソーシャルアートラボ 地域と社会をひらく』, pp.52-63, 水曜社  
サクラクレパス (2019) 「『コラム』クレパス・クレヨンはどう違う」, <[https://www.craypas.co.jp/press/feature/009/sa\\_pre\\_0015.html](https://www.craypas.co.jp/press/feature/009/sa_pre_0015.html)> (参照 2020年9月24日)  
笹原浩仁 (2016) 「食用色素 (食紅) の彩色材料としての可能性について」, 『福岡教育大学紀要』 (第65号 第5分冊) pp.61-69, 福岡教育大学  
笹原浩仁 (2017) 「食用色素 (食紅) の彩色材料としての可能性とその展開・教育実践」, 『福岡教育大学紀要』 (第66号 第5分冊) pp.67-74, 福岡教育大学  
関根靖浩 (2017) 「小鹿田焼産地の産業集積としての特徴と課題: 丹波焼産地と比較して」, 『経営研究』 (第68巻 第2号) pp.113-128, 大阪市立大学経営学会  
渡邊英則・大豆生田啓友編著 (2020) 「保育内容総論」 (新しい保育講座4) ミネルヴァ書房